とうちゃんと

工藤直子

筑摩書房

とうちゃんと

工藤直子

筑摩書房

工藤直子（くどう　なおこ）
1935年台湾に生まれる。お茶の水女子大学卒業後博報堂に入社。女性初のコピーライターとして活躍，のちフリーとなる。詩人。主な著書に『てつがくのライオン』『ともだちは海のにおい』『まるごと好きです』『のはらうた』などがある。

とうちゃんと

©工藤直子
一九八六

一九八六年九月十日　第一刷発行

著者　工藤直子

発行者　布川角左衛門

印刷　星野精版印刷
製本　矢嶋製本

発行所　筑摩書房
東京　神田小川町二ノ八
振替　東京六―四一二三
電話東京二九一―七六五一（営業）
東京二九四―六七一一（編集）

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

Printed in Japan ISBN4-480-81223-7 C0095

とうちゃんと　目次

一枚の写真　5
父の人さし指　11
ひざ　16
おどるコトバ　21
天ぷら　26
怒り虫　32
叱る　39
新しい母　45
あたたかい手　49
父の昔話　53
父の蒸しパン　59
満開の桜　65

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

父の背中　70
カンコロ腹　74
すみか　81
父のソラマメ　86
芋の風　91
父と金魚とプラットホーム　95
なんでも見てやろう　100
大正十二年　108
おれ、やっぱり　113
*
モーテーギー　123
なんで？　132

キャッ　139
旅芸人　143
*
まじめふう——長新太さんのこと　153
えりこさんの「時間」——岸田衿子さんのこと　158
朗読——阪田寛夫さんのこと　164
「とことん」のひと——今江祥智さんのこと　172
一瞬の情景——佐野洋子さんというひと　178
茨木さんと一緒に笑おう　184
山下さんの中の海　193
「もうひとつの国」へ　199
あとがき　207

とうちゃんと

装幀　島田光雄

「ひとに会う」会い方について、最初に刷りこまれたのは「とうちゃん」からだった。

パパ、でも、おとうさん、でもなく「とうちゃん」からだ。

散歩にでかけるとき、一歩目の足をむける方向で、その後、目の前にあらわれる景色がちがってくる。

ひとに会うとき、わたしは今でも、「とうちゃん」という第一歩からの、地続きの道を歩いているようである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一枚の写真

昭和十二年頃の台湾。校長官舎前の庭。傍にバナナの木が、大きな葉をゆらしている写真――両親と、きょうだい六人。全員揃って写っている写真が一枚だけ残っている。

明治二十四年生まれの父は、――おそらく当時の、新しもの好きの男性が、そうだったろうと思うが、たいへんに写真好きだった。

「なにかというと、『おい、写真とるぞ、みんな集まれ』だったな」

「そうそう。そのたびに、よそいきの服、着せられて、ね」

兄や姉が、父の話をすると必ず、父の写真好きが話題になったから、当時の男たちの中でも、かなり凝っていたほうだろう。本棚の一角に厖大な量のアルバムがあった。自分のカメラで写すのではない。専門の「写真師」が、御報参上、という形で出張して、どこででも撮ってくれたらしい。

小さい頃は、よく、このアルバムを引っぱり出しては眺めていたが、家族全員というのは、この一枚しかなかった。だから、とりわけ熱心に、この写真を眺めた。

工藤家を一目で眺められるのは、この写真だけだったから。

「お前、末っ子じゃないんだからな。末っ子は、おれ。お前は付録なんだからな」

七歳上の兄は、わたしを「おいフロク」と呼んだ。父が四十歳を過ぎてから、ポツリと離れて生まれたので、一番上の姉と二十歳、年が開いている。この写真の中でも、他のきょうだいたちは、至極まともな人間並の顔をしているが、赤ん坊のわたしは、よだれでよれよれになった服を着て、マリを片手に掴み、母の膝の上で猿みたいにみっともない。

「直子、お前はな、このとき泣いて泣いてな。そっくり返って暴れて、着がえさせんのヨ」

父は、わたしの汚れた服と腫れぼったい顔について、そう説明した。そういえば、父は当時の校長が着る官服を着、ステッキを腰かけた膝の間にたてて威風堂々としており、他のきょうだいも、制服や着物姿できりりとしているのに、母とわたしだけがパッとしない。泣くわたしに手こずって、母も着がえをするひまがなかったのだろう。

家の玄関先である。父と母が椅子に腰かけ、母の膝に、くたんとふてくされたように、わたし

が抱かれ、まわりを囲んで五人の兄や姉が立っている。「ハイ撮りますよ、ここを見て！」の声に、全員がカメラをみたのだろう。写真の中の家族は、一斉にこちらをみている。母も、こちらをみている。

わたしは、写真でしか母を知らない。わたしが二歳半のとき亡くなったから、おそらく、この写真が最後だったのではあるまいか。これ以後の家族写真の中に、わたしは写っているが、母は姿をみせない。また、これ以前の写真には、母は写っているが、わたしはまだ生まれていないので、いない。だから、この写真は、確かにわたしが母の膝の上に坐っていたのを見ることができる唯一の一枚なのである。

赤ん坊の時期を過ぎて、ものごころつく頃、きょうだいが一堂に揃ったという記憶もない。なにしろ一番上と二十歳離れているのである。自活しているもの、軍隊に行っているもの、学校の寄宿舎に入っているもの、など、バラバラに暮らしており、それぞれが休暇で時々もどる程度だ。わたし自身、母が亡くなって、小学校二年のときに新しい母がくるまでは、父とふたり暮らしだったり、上の姉たちのもとに引きとられていたりで、記憶が目まぐるしい。兄や姉は、入れかわりたちかわり目の前にあらわれては消えていく「おとなたち」という感じで、どうも、六人きょ

うだいの末っ子という実感が湧かないのだ。父親だけが、「わたしのとうちゃん」という感じで心に刷り込まれ、あとは、この一枚の全員写真で、「わたしの母ちゃん」「わたしの家族」を想像してみるのであった。

わたしは、よくこの写真を引っぱりだしてきて父の膝に寄りかかり、ひとりひとり指さしては話をせがんだ。「母ちゃん」のこと「ねえちゃん」のこと「にいちゃん」のこと——。

とりわけ母親のことは熱心に聞いた。

父と母は見合い結婚、それも写真だけの見合いだそうだ。台湾で教師をしていた父のもとに、郷里の大分から話があり、写真と手紙のやりとりの後、母がはるばる嫁いで来たのだとか。

父は農家の末息子である。

「あの頃は、四民平等といってな、サムライも百姓も、身分の区別はない、という時代になってな」

父の父は、ものは試しに、と、おそるおそる長男の嫁にと、士族の娘に申し込んだのだそうだ。

「無礼者！　といわれるかと思ったら、すんなり嫁にきてくれてな」この、娘さんが実に良い嫁さんになった。そこで、父の父は（嫁は、サムライの娘に限る！）と思い込んだのだそうだ。

「そこで、わしの嫁を探すときもな」

もういちど柳の下のどじょうを、と、同じ家に申し出て、長男の嫁になった人の妹を、「どうぞもうひとり下さいと頼んで、だな、それが、母さんだ」ということであった。

その後、兄や姉たちの思い出話に登場する母のイメージを総合してみると、なかなかの賢婦人だったようで、どうも、父は頭が上がらなかったらしい。しかし、あるとき「結婚前に、かあちゃんからどんな手紙もらったの？」と何気なく聞いたら、母からの最初の手紙を、まるごと暗誦してくれたので驚いた。

この時の父の、読みあげる口調が面白く、何度も母の手紙を暗誦してもらったが、そのたびに面倒がらず、初めから終りまで語ってくれた。

「このたびは、あなたさまの御許（みもと）へ嫁ぐことと相成り……」という出だしではじまる、かなり長文の候文である。漠然とした記憶しかないが、「お慕い申しあげ……」という単語も混り、なかなか艶っぽく、大胆だったように覚えている。

敗戦後の引き揚げのとき、厖大な写真は殆ど捨て、数葉が手許に残っているだけだが、その中に、この一枚の写真も入っている。

おとなになってそれをみると、この写真をもとにして、「母ちゃん」というものを想像してい

た、子どもの日々を思い出す。(ふーん、わたしは母ちゃんの膝にこうやって坐っていたのだな。すると……)

わたしは、写真の中の母の膝と、その上に乗っている赤ん坊のわたしを、穴のあくほど見る。

(……すると、わたしのお尻は、母ちゃんの膝の上にあるわけで……。お尻は、母ちゃんの膝に触っているわけで。……お尻は、母ちゃんを覚えているんだな)

わたしは、自分のお尻に意識を集めて、母親の膝の記憶を引っぱり出そうとする。

そうすると、どこからか、「このたびは、あなたさまの御許へ……」と朗読する父親の声が降ってくる。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com